



JIC インフォメーション

第201号 2019年4月10日

年4回 1・4・7・10月の10日発行

1部500円

発行所: JIC 国際親善交流センター 発行責任者: 伏田昌義

<http://www.jic-web.co.jp>東京オフィス: 〒160-0004 東京都新宿区四谷 2-14-8 YPCビル 7F TEL: 03-3355-7294 jictokyo@jic-web.co.jp

大阪・ロシア留学デスク: 〒540-0032 大阪市中央区谷町 2-7-4 谷町スリースリースビル 7F TEL: 06-6944-2341

はりねずみのジエーニャ



ロシア・旧ソ連 国際交流誌



上は、JIC ロシアセミナー黒田龍之助先生の講演会
 下左、モスクワのグルメ・プロジェクト（中央市場）
 下右、成田-サハリンを飛ぶオーロラ航空・小型機

<http://www.jic-web.co.jp>

<JIC ロシア セミナー2018>

もう一つの『ロシア語だけの青春』

～わたしがJICのロシア語通訳だった頃～

……………黒田 龍之助……………2P

あの頃のJICと黒田くん……………伏田 昌義……………9P

モスクワのグルメ・プロジェクト

……………チスティリーナ・イリーナ……………10P

サハリンの旅 雑感 ……………神保 泰興……………11P

<ベラルーシ留学記> エピソード集「買い物」……………14P

日本とウラジオ結ぶエッセイ集……………榎本 真奈美……………16P

JIC では、Jクラブ(JIC 友の会)会員を募集しています。
 年4回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

JIC ロシアセミナー2018

恒例の JIC ロシアセミナーを昨年 11 月 17 日、東京で開催しました。講師は 2002 年に最初の JIC セミナーで講演をいただいた黒田龍之助先生。ロシア語や外国語についての著作の多い黒田先生ですが、今回は「もう一つのロシア語だけの青春」と題して、若かりし頃「JIC の専属通訳」として仕事をした思い出話をユーモアたっぷりに話していただきました。(編集部)



もう一つの「ロシア語だけの青春」

～わたしがJICのロシア語通訳だった頃～

黒田 龍之助 (言語学者、神田外語大学特任教授、神戸市外国語大学客員教授)

本日のタイトルは「もう一つのロシア語だけの青春」です。皆さんの中には、最近、私が現代書館から出した『ロシア語だけの青春～ミールに通った日々』を読んで興味を持ち、ご来場いただいた方もいらっしゃるかと思います。もしかしたら私からロシア語の勉強方法とか、ミールにはどのようなメソッドがあったとか、そういうことを聞こうと期待なさっているかもしれませんが、そのような話をするつもりはありません。というのは、知っていることはすべて本に書いたからです。

今日は私の「実践編」をお話します

「もう一つのロシア語だけの青春」というタイトルにしたのはなぜかと言いますと、実はこの物語には「表」と「裏」がありまして、今日は「裏」を話そうと思っているわけです。書籍となった『ロシア語だけの青春』は「表」の「理論編」です。これからお話しするのは私の「実践編」。私がその頃どんなふうにロシア語を使っていたかという話をしたいと思います。

『ロシア語だけの青春』の初めにも書いているとおり、私はソ連・ロシアに留学したことがありません。留学セミナーの前説をやるには相応しくない人間で、「留学はしなくてもロシア語は上手くなる」なんて言うてはいけないと思いながら、今日はここにきました(笑)。そうならないように、これから苦労しなければなりません(笑)。これまで出した本には一切書いていないのですが、私は一時期、このセミナーの主催者である JIC のほぼ専属通訳でした。私は JIC でずっと仕事をし、日本国内を飛び回り、ソ連・ロシアにも行き、様々な経験をしました。だから留学行かなくても、ロシア語を使ってきたという話になるのですね。もちろん、今では望めない環境かも知れません。

したがって、今日は私と JIC の話、つまり「もう一つのロシア語だけの青春」の話となるわけです。

「筆塚親分」の紹介で JIC の伏田さんと出会いました

そもそも私が JIC とどうして出会ったかという話から始めましょう。

JIC を紹介してくれたのは、『ロシア語だけの青春』の中に出て来る筆塚真理子さんだったと記憶しています。通訳の筆塚さんはミールのクラスメイトで、私のお姉さんの一人と言ってもよいくらい、本当にいろいろと教えてもらった方ですが、たぶん彼女の紹介で東京駅の八重洲口にあったホテルの1階の喫茶店で、いま後ろの方でニコニコと写真を撮っている伏田さんと会ったのが、初めてだったと思います。

そのとき私は大学の4年生でした。夏休みのバイトで、ピオネールキャンプに行く子どもたちの付き添いをするという話でした。私は喜んで引き受け、1987 年 8 月と 88 年 8 月の 2 回、ピオネールキャンプの通訳として JIC から派遣され、旅行上は日通旅行を通して沿海州のナホトカに行くことになりました。8 月初めの 2 週間ぐらいを、ピオネールキャンプ場で過ごしたわけです。

ピオネールキャンプというのは、もうご存知ない方もいるかも知れませんが、ソ連のいわゆる「少年団」です。そこへ日本の子どもたちを連れて行き、交流させるというプログラムがありました。私が初めてではなくて 3 回目か 4 回目で、その前は筆塚さんが通訳で行ったのだと思います。筆塚さんは私のことを「ドラコンチク」と呼ぶのですが、「ドラコンチク、この夏はナホトカに行って通訳やらない？」って言われ、筆塚さんは私の親分ですから「へい！」って言って、行くことにしたわけです。

ピオネールキャンプで「王様ごっこ」をやりました

当時はまだソビエト時代です。施設内にはレーニンの肖像画があちこち掲げられていました。

ピオネールというのは、小学校高学年から中学生ぐらいの子

どもたちで組織されていた団体です。それより上はコムソモールという青年団になり、またピオネールの下にはアクチャブリヤータ(=10 月団)という子どもの組織がありました。で、日本から小中学生の子どもたちをピオネールキャンプに連れて行って、私はその通訳として同行したわけです。そのときの話の一部は、現代書館から出した『ロシア語の余白』という本に書きました。例えばロシア人と日本人の子どものカップルができて、その愛のキューピッドをやるという最悪の仕事をした話とか(笑)、他にもこの仕事を通して様々なことを学びました。



皆さんはロシア語に興味があると思いますので、ロシア語に関するエピソードを 2 つ話します。

一つは、このキャンプにはだいたい同じ年の子どもがいっぱいいるんですけども、なぜか他の子よりも少し年下の子が一人、二人いました。多分、お兄ちゃんかお姉ちゃんがピオネールで、それで弟も親に預けられたんでしょう。まだアクチャブリヤータなので、ピオネールの行事には参加できなくて、わりと一人でポツンとしているので、よく一緒に遊びました。小さい子は容赦がないので、他の子たちはみんな「ドラコンチクさん、ロシア語上手いね」とか言うんだけど、その 5 つぐらいの子から「いまいちだね」みたいなことズバツと言われたりして傷つくんですけど(笑)、その子とよく遊んだんですね。彼はいつも手を後ろに組んで偉そうに歩いていたんで、「なんか、きみて王様みたいだね」って言って、よく二人で王様ごっこをして遊びました。それで、彼の前で「陛下、なんなりとご命令を」みたいなこと言うときに、……「陛下」って何て言うかご存知ですか？

”Ваше Величество“

これを知って良かったと思いました。なんでこんな単語を知ってるかというと、私はサムイル・マルシャークの『森は生きている—12 ヶ月の物語』が好きで、その中に出てきたから覚えていたのです。どんな単語も覚えておけば無駄がないです。

それで、その子を王様に見立てて、私はお付きの者をやりとりして遊んでいたのですが、そんな経験はこういうところじゃないと出来ないわけですね。もちろん、通訳としての仕事はいっぱいあります。ただ、そうじゃないところで面白い経験をしたことも、私のロシア語学習にとっては非常に貴重なものでした。

もう一つ、ピオネールキャンプでの通訳は私一人ではなく、ソビエト側も通訳を用意します。ウラジオストクには極東大学があり、その日本語学科の学生が来て、二人で組んで通訳をやりました。向こうは凄いでできるヤツなんだろうと思っていたら、現れたのは私よりも下の学年のサーシャ・ボロシロフくんという学生でした。サーシャくんはサッカー担当、私は水泳担当みたいに適当に分担して、お互い凸凹コンビで通訳をやりました。サーシャくんは極東大学で頑張って日本語を学習している学生だったのですが、困ってましたね。それは、キャンプの参加者がほとんど大阪の子だったんです。

私だって江戸っ子ですから、ネイティブとして分かるところもあるものの、子どもたちの大阪弁がイマイチよく分からないこともありました。言葉っていうのはちょっとでも違うと随分難しいものだということを実感しました。でもね、だんだん慣れてくるんですよ。ある程度まではね。だからサーシャくんも普通のいわゆる共通日本語を学んでいたはずなのに、気がついてみると彼の言い方がだんだん『西っぽく』なってきた、「あかん」とか言うようになっていましたし(笑)、私も「なんとなく黒田さんのロシア語、ナホトカつぽくなったね」って、これは喜んでいいのかわからないんですが、そんなことを言われた経験があります。このような経験は、今は出来ないですね、普通はね。

JIC の杉浦くんは大学の「クラスメイト」です

次は JIC の杉浦くんの話しましょう。杉浦くんというのは、この会場の入口に座っているメガネをかけて髪の毛の白くなった元・青年です(笑)。実は、この会場のすぐ近くに私が通っていた大学がありまして、杉浦くんはそのクラスメイトと言えばクラスメイトです。私がその大学のロシア語学科の 2 年生に試験を受けて編入したことは本に書きました。2 年生は全部で週 6 コマのロシア語授業があつて、「地獄のロシア」と言われてましたから、とにかく厳しく教えられるのですけれども、その内の一つのクラスだったと思います。宇多文雄先生の授業でしたが、あるときロシア語学科全員 60 人が集まるクラスに宇多先生が入ってきて、その後ろに顔色の悪い青年がトボトボついて来ていまして、それが杉浦くんだった。何だろう？ 転校生かな？ と思ったんですが、大学だから転校生はないですね。あとで分かったのは、彼は第 2 外語でロシア語を取っていたのに、なぜか続きのクラスが無くなっちゃった。で、仕方がないので、ロシア語学科の授業に出ることで代わりにしようとしたみたいで、これは気の毒です。法学部生でロシア語をとっていただけなのに、いきなりロシア語学科に放り込まれて、まわりは誰も知らないし……。なんか気の毒な青年がいるなあいつも思っていたのですが、その人と後に JIC で再会することになります。

JIC 教育交流の旅ではヘロヘロになりました

JIC からは様々な仕事を依頼されたのですが、そのうちのわりと初期だったと思いますけど、「教育交流の旅」というのがあり

ました。12 月末から正月をはさむソ連旅行で、行き先はモスクワ、レニングラード(現・サンクト・ペテルブルク)、それからラトビアのリガでした。これがですね、もう聞くも涙の物語で……。そのとき私は通訳として、杉浦くんは添乗員として、専修大学の先生を団長に日本の教育関係者、学校の先生など 10 名ぐらいのグループで行きました。交流プログラムなので、向こうの学校訪問や教員たちとの交流会の予定が組まれていたのですが、モスクワに着いてソ連側の窓口で連絡をして分かったことは、交流プログラムの準備が何一つできてないことでした。二人で目の前が真っ暗になって、とにかく交渉しようとして……。翌日はモスクワ観光の予定だったので、お客さんたちは全員トロイカ体験か何かに行ってもらって、二人でソ連対文連(ソ連対外文化交流団体連合)の事務所に乗り込んで、「代表出せ！」と言ったら、「休暇を取ります」って言われて(笑)……。もう「どうしようね、これ」という具合で、散々な目に遭ったんですね。

それで大慌てで現地旅行社(インツォリスト)の担当者と相談して、休み中の先生をかき集めてそれらしい交流会をやったりとか、ピオネール宮殿に見学に行ったりとか、とにかく何一つ出来てなかったのですが、何とか格好をつけました。私は JIC から杉浦くんが来るから「まあ安心だ」と思っていたんですが、後で聞いたら杉浦くんもほぼ初めての添乗で、彼は彼で「黒田くんはいろいろ慣れているから大丈夫だろう」と思っていたらしいです。それで、行く先々でいろいろ苦労して……。今でも覚えてます、確かモスクワのコスモスホテルだったと思います。二人ともへろへろに疲れて、ホテル内のカフェに入って、ソビエト製の清涼飲料水を飲んだときに「これは美味しい！」って、「ドクター・ペッパー“みたいな味でしたが美味しくて、正月で二日酔い気味だったせいもあり、「もうソビエトやめよう！二人でこの飲料水の輸入会社をやるんだ！」とか、ワケ分からないこと言って、ハイになってたことを覚えています。それくらい、本当に苦労を共にした仲間だったのです。

帰国日は「昭和最後の日」でした

写真は、あまり写りが良くないですが、「やれやれみんな生きて帰ってきたね」ということで、成田空港で撮ったものです。これには意味があって、撮影日は 1989 年 1 月 7 日なのです。分かります？ 昭和最後の日なんです。成田空港に着いたら、「昭和天皇が亡くなった」というニュースが入って来た。つまり私は、昭和 64 年は 1 日しか日本にいなかったんですね。その前の 6 日間はソ連にいたわけですから。

それで、このあと解散してみんな家に帰るんですが、当時私は大森駅から歩いて 20 分ぐらいのところに住んでいました。JIC というのは非常に懐の深い団体で、もう大変な目にあってへろへろに疲れた私に、たぶん杉浦くんか、または空港で迎えてくれた伏田さんだったと思いますが、「今日は駅からタクシーで帰っていいから」と言ってくれたので、荷物も重いし助かりました。駅からタクシー乗ったときにラジオが流れていて、「新しい元号は



教育交流の旅(成田にて)、左から黒田、杉浦

“へいせい”と言います」と聞きました。ところが私はへいせいというのが全くイメージがわからなくて、勝手に「平征」という漢字を思い浮かべたのです。どういう意味か分かりますか？ つまり「平和を征する」というのは、ロシア人の名前、ウラジーミルですよ。ウラジはウラジオストクのウラジで「征服する」。ミールはこの場合「平和」です。だからウラジーミルは平和を征する者という意味ですね。某言語学者が、ミールの意味を間違えて「世界」の方の意味にとり、「ロシア人は恐ろしい。『世界征服』って名前をつけてる」とか言ってるのは、まったくロシア語がわかっていない証拠です。ミールが「世界」も意味するようになったのは新しく、昔はスヴィエート(свер)という単語を使っていたわけですから、ありえないですね。

とにかく平和を征する。「へえ、ついに日本の元号もロシア人みたいになったじゃん」とか思っていて(笑)、翌日、小淵官房長官の記者会見ニュースを見ながら、間違っていたことを知った次第です。ということは、もう 30 年も昔の話ですね。その平成がいま終わろうとしているわけです。

そんなわけで、これは JIC で最初の頃にやった仕事だったと思いますが、大変印象深く覚えています。

フリー通訳の仕事でロシア語と人生の勉強をしました

当時は私も大学を終え、そろそろ大学院生になろうとしていた頃です。お金はいくらあっても足りません。ちなみに私は大学院の学費は自分で稼いでいました。そのほぼ 6~7 割は JIC で稼いだという気がします。もう、JIC から声がかかればどこへでもという感じでした。当時、電話機は黒かった。家に設置してある黒い電話機がジリリと鳴ったときに、それが伏田さんからだったら、「よっしゃー、これで仕事だ！」って感じで、JIC とは 1980 年代の終わりから 90 年代にかけてたくさん仕事をさせていただきました。それは本当に勉強になりました。

勉強というのは二つ。ロシア語の勉強と、人生の勉強です。世の中はいかに不条理に満ちているかということを、ガツン、ガツンと学んだ次第です(笑)。

サハリンやビロビジャン、珍しい所に行きました

JIC のツアーで珍しい所にも行きました。「民族問題を考える旅」というのがあって、その添乗でその頃はまだ日本人がほとんど行けなかったサハリン(樺太)に行くことが出来ました。今は直行便でサハリンに簡単に行けるみたいですが、当時はハバロフスク経由でした。ユジノサハリンスクに行ったのは夏だったので、驚いたことにサハリンの空港に着いたときにパスポートチェックがありました。すでにハバロフスクで入国したときにパスポートチェックしたのに、「何でもう一回チェックするの?」と思ったのですが、嫌だとは言えないから、もう一度見せて入りました。「ここはソビエトの中でも、ソビエトではないんじゃないか」というような、不思議な経験でした。

「民族問題を考える旅」のもう一つの行き先はビロビジャンでした。ビロビジャンってわかります? これはハバロフスクの西(列車で約3時間)にあるユダヤ人自治区の町です。スターリンの指示でユダヤ人たちが半強制的に集められて暮らしていました。「ビロビジャンの星」という地元新聞が出ていたり、イディッシュ語の本が出版されていたり、ユダヤ文化がいろいろあって、なかなか面白かったです。



「民族問題を考える旅」サハリンにて

サハリンでもビロビジャンでも新聞社を訪ねたり、ロシア人以外の民族文化を知る旅でした。

質問内容が分からないのに答えだけ通訳する、すごい経験もしました

サハリンには韓国・朝鮮系の人たちが多く暮らしています。「レーニンの旗」という朝鮮語新聞社を訪問したときに、参加者の中に在日韓国朝鮮人の男性と日本人で朝鮮語のよくできる女性がいきました。男性の方は在日ですが朝鮮語はほとんど出来ない。私が通訳をしていると、「君は朝鮮系か?」「はい」「なぜ朝鮮語が出来ないのか?」、女性に対しては「あなたは日本人か?なぜ朝鮮語が出来るのか?」って、ちょいちょい話がずれて行く。通訳をしていて私が一番苦労したのは、女性の方は本当に朝鮮語が上手い人で、その地元新聞の編集部を訪問したときに、向

うの編集長にペラペラと朝鮮語で質問するのです。朝鮮語新聞の編集長ですから彼はもちろん朝鮮語が分かるんですが、ところがこれはソビエトに多くあるパターンなのですが、朝鮮系の人の多くは聞けば分かるけど口からは出ないのです。これは、後に行ったウズベキスタンのタシケントでもそうでした。

何が困るか分かりますか? 彼女が朝鮮語で質問すると、編集長はロシア語で答えるのです。つまり私は質問の内容が分からないのです。なのに質問に答える編集長のロシア語を、日本語に訳さなければならぬ。これは本当に困りました。訳しながら、「話通じます? 辻褄合います?」って聞いたら、「合ってる。分かる」と言うんだけど、これは厳しかったですね。質問が分からないのに、答えのロシア語を日本語に訳すという、すごい経験をしました。

中央アジアのウズベキスタンにもスターリンの政策で極東から強制移住させられた朝鮮系の人がたくさん住んでいるので、同じような経験をしました。そちらは半分遊びの旅行だったのですが、朝鮮語がよく出来る友人と二人でレイノック(市場)に行って買い物をしていると、突撃インタビューとか言いながら、友人が朝鮮語で質問すると、店のおばさんが「あなた言葉が分かるのかねえ!」とロシア語で答えるわけです。

こんな面白い経験をすることもできたんですね。

二つの旅行を添乗員でハシゴしたこともあります

「学生交流の旅」というのもありました。いろんな旅行の添乗員兼通訳の仕事をやった中で、二つの旅行をハシゴしたことがあります。2つのツアーを渡り歩く添乗員。前半は「民族問題を考える旅」だったかもしれません。後半が「学生交流の旅」で、一度帰国してすぐまた出発するのも大変なので、ハバロフスクで日本から来るグループを待ち受けて仕事をしたわけです。今でもよくやったなと思います。

「学生交流の旅」というのは、日本の大学生たちがモスクワやレニングラードでソ連の大学生と討論会や交流会をするという企画でした。通訳は普通だったら成田空港から一緒に飛ぶとか、ハバロフスクだと新潟から一緒に飛ぶところなんですが、私はハバロフスク現地でグループを迎えました。そうしたら学生たちがみんな私をロシア人だと勘違いして、「黒田さん、あなたって本当に日本語上手いですね!」って言うんです。間違えられて面白いなと思ったんで、「いやいや、有難うございます」なんて言って、そのまましばらくは黙ってたんですけど...(笑)。

今でも覚えているのが、モスクワであった学生の交流会です。日本から7~8名、ソ連側は14~15名いたかな。外国語別の交流会で、日本からはそれなりに英語ができる子が参加していました。私は学生交流のときには通訳しないで、必要がなければ見てようと思っていました。ところがソ連側からは、英語グループ以外にドイツ語グループも来ていたのです。それなのに日本人は全員英語だったので、英語グループの子たちと交流してしまい、ドイツ語のロシア人学生たちはやる事がなくなってしまった

ので、私が代わりにロシア語でお相手をしました。そのとき言われたのが、『日本人って英語ばかりなんだね』。そうなんです。パリの空港でも、荷物検査の担当者から同じようなことを言われたことがあります。日本人って英語ばかりというイメージであることを痛感しました。

彼らと話してみても面白かったですよ。実は当時のソビエトではドイツ語というのは非常に有力な外国語で、英語よりも学習者が多いとか、いろいろな話が聞けました。

インバウンドのアテンドもやりました

通訳をやるときには 2 種類あります。一つは日本人と一緒にソ連に行って通訳をするパターン。もう一つは、ソ連からのお客様を迎えて日本を案内するパターン。こちらもよくやりました。

当時、JIC はソ連から政治的になかなか偉い人を呼ぶことが多くて、私は服装にはたいして興味がないけど、夏の暑いときでもネクタイぐらいしなきゃまずいような仕事をしたことがあります。議員会館でも通訳をやりましたね。ある参議院議員との面会に、代表団を連れて行ったことがあります。そのときのことで、今でも覚えています。議員会館の部屋に案内したのはソ連の某州議会の議員達たちでした。ただの表敬訪問みたいなものだったのですが、そのとき、ロシア人たちが一番気にしていたのは時間でした。「時間に遅れちゃいけない」、「きちんと間に合わなきゃいけない」とすごく気にしているのです。多くの人がロシア人は時間にルーズだと言われますけれども、それは違うことがよく分かりました。政治的あるいは社会的に重要なポストにいる人間は、どこでも時間には厳しいのです。そういうことを何も知らないで「ロシア人はこうだ」と決めつけることは危険ですよ。もちろん全体的なロシア人の傾向というのはあるかも知れませんが。

もう一つ、彼らは「服装はちゃんとしなきゃ」と気にしていて、アイロンを借りたいと言うのです。ソビエトのホテルではアイロンを貸してくれるので、ロシア人は自分でアイロンかけをやる。日本だったらクリーニングですよ。そうすると一日待たないと返ってこないの、すぐにきちんとした格好するために、アイロンを貸してくれと言うわけです。

杉浦くんは「ああ～、やられてもうた！」と言いました

そこだけ話すと、ロシア人も素晴らしいなって思うんですけどね。それだけでもなくて……。東京のホテルに泊まっていたのですが、ホテル料金は前もって支払ってありました。で、帰国の日に荷物を車に乗せた後でチェックアウトに行ったら、料金は払ってあるはずなのにかなりな額を請求されて、どうしたんだと思ったら、ホテルの部屋のミニバーが全部空になっていたんです。お客さんたちが飲み物を全部カバンに入れたらしい(笑)。フリードリンクだと思ってたんですね。ウイスキーとかワインも入っていますから、結構なお値段を払うことになって……。ちょうどそのとき、一緒に見送りに杉浦くんが来たので、「こういうことあってさ。払ったけど、ひどいと思わない？」って言ったら、「ああ～、

やられてもうた！」で終わりです(笑)。全然気にしてないんだから。これが JIC の懐の深いところで、困ったことに遭ったときも「まあ、しょうがないね」という感じで柔軟に対応していくのが「JIC らしい」というか、その点は現在にも繋がっていると思います。

今では、ロシアを旅行するのもずいぶん楽になりました。昔はもっと大変でした。添乗してひどい目に遭った経験は、伏田さんも杉浦くんもいっぱいあると思います。飛行機で変なところで降ろされて、荷物を飛行機から自分でピックアップして持って行くとかね。私が体験したのは今よりもっと不自由な時代で、だからこそ面白いことがいっぱいありました。

今は基本的に良くなったとはいえ、しかしロシアはロシア、旧ソ連は旧ソ連です。だから「やられてもうた」ぐらいの気持ちでいいと、とてもやっていけない。

今回のセミナーの打合せで、数ヶ月前に伏田さんと杉浦くんと 3 人で会ったときにも、「基本的には変わってないな、この国は」という点で話が合いました。相変わらずいろんな困難がある。昔だって、教育交流でモスクワに行ったら何もアレンジされてなかった。議員たちはミニバーの飲み物を全部カバンに入れてしまった。同じようなことは今でもきつとあって……。で、私たちはあのときに「いつかこれを笑ってやる」と、「笑って話す日が来るんだ」と信じながら、炭酸飲料を飲んでたんですね。だからそれが実現したことは嬉しい。何も起こらない旅行はつまらないのです。何かあったほうが、人の記憶に残るものです。

あるグループを連れて旅行したときに、お客の一人がよせばいいのにモスクワのアルバート街で屋台の兄ちゃんから箱に入った懐中時計を買いました。ホテルに帰って、開けてみたら石ころだった。凄く怒ってました。でも後に会ったとき、「あれだけが印象に残ってる」「思い出深い旅行になった」と言っていました。あまり嬉しくない思い出ですけどね。けど、そういうことってあるんじゃないでしょうかね？

酷い目に遭って、あまり酷いのは嫌ですが、だけどそういうことが笑えるようになったなと思いました。

「この幸せ者！」と言って伏田さんは写真を撮りました

良いこともありました。「ウラジーミル・ウービンさん」と言ってもわかる方いらっしゃいますか？ 若い人は知らないでしょうが、ウービンさんは 1980 年代初頭に、NHK テレビのロシア語講座のロシア人講師をしていた方で、元々はモスクワ放送のアナウンサーです。当時彼はジャージ・ワロージャ、ワロージャはウラジーミルさんのことですね、ジャージ・ワロージャの呼び名で、モスクワ放送の子ども向け番組「おやすみなさい子どもたち」という番組の司会をなさって大変な人気を博しておられました。その超人気者が、NHK の招待で 2 年間日本に来て、テレビ講座を担当したんですから凄いですよね。

このウラジーミル・ウービンさんを、なぜか JIC が 80 年代の終わりに日本に招待しまして、私が通訳をするチャンスがあったの

です。私はもう嬉しくて、憧れのジャーギャ・ワローギャと写真を撮ってもらいました。白水社から出ていた『標準ロシア会話』というのがある、今はもう手に入らないですが、この会話集の音声を吹き込んでいたのがジャーギャ・ワローギャなんです。とてもいい声でした。憧れの人と会えて、「私はあなたの番組を日本で



見ていて、すごく好きだった」という話をしたら、凄く喜んでくれたし、その人の通訳を出来たことは本当に良かったと思っています。

この写真を撮ってくれたのは、たぶん伏田さん

だと思います。伏田さんが写真撮りながら、私があまりにも嬉しそうな顔をしてるんで、ニヤッと笑って「この幸せ者！」って言ったのを覚えてます。

通訳謝礼はミールの貝澤さんと飲んでしまいました

このウーヒンさんはいろいろ顔が広く、日本の大学の先生とも交流があったようです。早稲田大学に現代ロシア文学の安井亮平先生という方がいらっしゃって、安井先生のゼミにウーヒンさんをお連れしました。安井先生は私の大学院にも非常勤講師として授業にいらして、なぜか知りませんがその頃から先生は私をいつも「龍之助くん」と呼ぶのです。それで、安井ゼミでウーヒンさんに 7、8 人のゼミ生を前に話をしてもらうのですが、「まだ下級生もいるから通訳が必要だ」というので、私は当然安井先生がなさるんだらうと思っていたら、安井先生がにっこり笑って「今日の通訳、龍之助くんだよ」とおっしゃる。「えっ！ボクがやるんですか？」って感じで通訳をやった、それは大変でした。

というのはウーヒンさん、アネクドートとか笑い話を披露するんですよね。そうすると、笑わなければ、沸いてくれなければ、私の訳が悪いみたいになるじゃないですか。それで凄く緊張して通訳しました。まあなんとかウケを取り……、通訳を何回も経験すると、笑いを取らなければならない場面もあって、そういうときにちゃんと笑わせる方法というのもあるんですね。

もっともその後で、安井先生が言うんですよ。「ある人が通訳を連れて、そういう笑い話の講演をしたら、みんながずいぶん笑ってくれるので、なんて上手い通訳だろうと思った。で、この人いったいどんな通訳をしてるんだらうと思って真相を聞いてみたら、その通訳は正直に、『すみません。訳せないんで皆さん笑ってください』と言って、それでみんな笑ってくれました』と言ったそうだけど、この話、本当でしょうかね？」。こんなことを終わった後に言うから、先生も酷いですよ。

でもね、安井先生はニコニコして、きちんと「謝礼・早稲田大学」と書いたのし袋を用意していて、一時間半くらいの通訳で、早稲田大学から 2 万円いただきました。いや、もう本当に破格の収入ですよ。本番は大変でしたが、まあ、儲かって良かった(笑)。

で、そこからミールに話が少し繋がります。『ロシア語だけの青春』にも出てきますが、現在、早稲田大学で教授をやっている貝澤哉くんというクラスメイトがミールにいて、授業が終わったあと代々木のいつもの飲み屋に一緒に行って、貝澤くんはこの謝礼を見せびらかしたんですね。「今日、早稲田から謝礼もらっちゃった」と言ったら、貝澤のヤツ、「はあ〜、これが俺の学費の一部かと思うと…」とか嫌なこと言うから(笑)、「わかった。今日おごるよ」って、全部使ってしまいました(笑)。そういうことも含めて、ロシア語と関係あることばかりやってきたのが、私の物語なのです。

ミール、通訳、大学院〜三本立ての『ロシア語だけの青春』でした

若い人から、「どうやったら通訳になれるか？」「通訳の素質はなんですか？」と聞かれることがあります。私はプロの通訳ではないので、正確には答えられない。だけど私が JIC から通訳の仕事をとくさんもらった理由は、いくつか思い当たります。

よく使ってもらったのは、その頃は若い男の子でロシア語が出来るのがいなかったの、便利だったのでしょう。なぜいなかったか。私がロシア語を曲がりなりにも始めたのは 1980 年代のごく初頭です。その時代にロシア語を始めた人は非常に珍しかった。1979 年 12 月末にソ連軍がアフガンに進攻した直後で、当時『ソ連脅威論』が吹き荒れていました。ソビエトに対するイメージは 2 つでした。悪い、あるいは「特に悪い」(笑)。そのうちの特に悪い時期でした(笑)。

特に悪い時期だったにもかかわらず、私は全くそういうことを考えないでせつせとロシア語を勉強していたことは本に書いた通りです。そうすると、上手くなる頃に周りに出来る人がいないんです。

それから男の子というのも大事で、体力を期待されます。「通訳の素質」と聞かれて私が必ず答えるのは、「片手に自分のトランクを持ち、もう片手にお客さんのトランクを持って、新幹線のホームを端から端まで全速力で走れること」。やりました、京都駅で(笑)。で、そうやってお客さんをひっぱりながら何とか新幹線に乗せる。実際そういうことが必要なんです。

こうやって、通訳をやりながら、ミールの授業に通いながら、大学院に行きながら、という 3 本立てで当時は生きていたと思います。これがなければ、今のようなロシア語を身に付けることが出来なかったでしょう。学校の勉強とは全然違う単語をいっぱい覚えしました。赤坂見附にあったソ連・ロシア専門の免税店(第一音響)にもよく行きました。そういうところで使う単語って全く違いますよね。エッセイにも書きましたが、ダブルカセットデッキとか

ウォークマンなんて単語、大学院では絶対使いません。その手の言葉をいっぱい覚えて、忙しく生きていました。これが私のロシア語の実践編なんです。

ロシア語を磨くチャンスは留学だけではありません

まとめに入りたいと思います。

今、大学生を実地で学ばせようとするさまざまな取り組みがあります。インターンシップですね。最近の大学生はこういうものに参加します。だけど、私はインターンシップではわからない世界にいました。ちゃんとお金をもらって、その代り真剣に仕事をやってきました。今の世の中、私から見るとつまらないです。制度が整いすぎていて、何かラインに乗らなきゃいけないような……。いや、もしかしたら、その頃もそうだったのかも知れません。しかし私のようなメインストリームからドロップアウトした人間にも、面白いチャンスがいっぱいありました。JIC でいろいろな通訳をすることができたのも、その一つです。その経験が今日の私に繋がっています。大学の先生は「象牙の塔」に閉じこもって、世間を知らないと言われます。私も他の仕事を経験していませんから、そういう人間の一人かも知れませんが、少しでも世間と接点があるとしたら、それは JIC を通してやった通訳のおかげだと思っています。留学にも全然行ったことがありません。これまでの人生全部合わせても、ソ連・ロシアに 3 ヶ月いたかどうかというところです。けれども、若いときに、ロシア語を使うきわめて実践的な経験を積むことが出来たのは、JIC のおかげだと思っています。

ということで、このままいくと「なんだ、留学しなくて良いのか」ということになってしまって、非常にまずいのですが(笑)、私はこう思います。まず旅行をしましょう。旅行も JIC はやっていますからね。まずはロシアを見に行くということも大事じゃないかと思います。

留学に関して最後に申し上げておきます。これは別にロシアだけではないですが、安易な留学は危ないですよ。今多くの人が留学しますが、留学で失敗する例って耳に入ってこないですね。しかし教員をやっていると、聞こえてくるんです。向こうで合わなくて引きこもってしまう人の話とか、いろいろ聞こえてきます。だから留学するのであれば、よく準備してから行ってください。自分がそこに合うかどうか見極めるために、留学の前に旅行することも意味があると思います。いきなり長期間向こうに行って、精神的に参ってしまったら本当に辛いことになりますよ。一番怖いのは、ロシアどころか外国へ行くのが嫌になってしまうこと、外国語を勉強するのが嫌になってしまうことです。皆さんがロシア語と良い関係を保つためには、まずは現地をよく見てから留学しても遅くないのではないかと思います。

ところが私というラッキーな人間は、JIC のおかげで身銭を切らず、お金いただきながら、とっても実践的なロシア語経験をしたという、なんとも不愉快な話でした(笑)。どうも有難うございました。(2019 年 11 月 17 日、JIC ロシア・セミナーにて)

留学についてもう一言；

夢を育てるには時間がかかります。夢とお金は貯まるまで時間がかかるんですよ。あわてて行かない。今の留学はみんな早すぎるのです。夢を十分に育ててから行けばいいのに、ちょっと興味があるとパッと行っちゃう。これでは本当の楽しみがない。だから、学部時代に留学した人はまず大学院には行かない。というか、そこで自分の限界を感じてみんな就職してしまう。大学院生になることだけが能ではないので、それはそれでいいんですけどね。でも勉強だって、そこでおしまい。

先生によっては、すぐ留学を勧める人もいますが、私は違いますね。うちのゼミ生の条件は「留学は基本的に行かない。検定試験も受けない。そういう条件の中で頑張る子は来なさい」と言ってる。留学して、インターンシップに行くと、ロシア語がよくできるような学生は、ほかの先生が可愛がってくれるじゃないですか。うちはそうじゃない学生たちを集めています。いろんな方針があると思うけれど、私はあまり早く留学することはないと思っています。

検定試験については、こういうものがあるからみんな食欲に勉強しないのです。検定試験があると誰でも試験向けの対策を立てる。試験に出そうな単語しか調べない。「陛下」とか「ウォークマン」を覚えない。だから、すごく浅い外国語理解になる。検定試験を奨励する人もいますが、私はそうではない。検定試験には出ないところで、いろんなものを自分で勉強している人たちを、私は評価しています。

留学の準備に関して何をすればいいか、留学経験がないので私も分かりません。でも、「向こうに行けばなんとかなる」と思うのは出鱈目ですよ。よく言うのは、「少しでも単語を覚えてらっしゃい」ということです。日本で覚えようが、現地で覚えようが、単語を覚える苦労は同じです。留学したら自然に覚えられるなんて真っ赤なウソです。みんながロシア語を話してるからと言いますが、ちゃんと聞きとれなければ何もできません。看板をみれば単語を覚えると言いますが、看板は名詞ばかりで、動詞や形容詞は限られています。変化のパターンもごく一定のものしかない。だから漠然と「向こうに行けば何とかなる」みたいな考えは甘すぎるんです。

皆さんせっかちなんですよ。せっかちな人には検定試験も留学もいいでしょう。しかしそういう人は、大学を卒業した後、25 歳ぐらいで外国語をやめてしまうと思う。そうならないために、もっと長い計画を立てて外国語をしっかりと勉強して欲しいというつもりで検定試験と留学は気をつけてねと言っています。

(この項は質疑応答から要約)。

*講演会で使われた写真を黒田先生からそのまま提供していただきました。

あの頃の JIC と黒田くん

伏田 昌義

黒田龍之助さんの講演を聞きながら、「あの頃は随分いろんなことをやった。失敗も多かったけど、それでも楽しかったな」と、30 数年前を懐かしく思い出した。

古い資料を引っ張り出して、あの頃の JIC の活動を思い出してみる。40 年前の日本とソ連(ロシア)の関係は、黒田講演にあるとおり「特に悪い」時期だった。1979 年末のソ連軍アフガン進攻に反発した米欧諸国は 80 年夏のモスクワオリンピックをボイコットした。日本もこれにならって五輪参加をボイコット。当時、金メダル確実と言われていた柔道の山下泰裕選手(現東海大学教授)は涙を吞んで参加を断念した。

この日ソ(ロ)関係が最悪の時期に、東アジアの冷戦対立を緩和し平和を実現することを目的として JIC 国際親善交流センターは活動を開始した。五輪ボイコットに反対して 300 名の観戦団をモスクワに送り出したのを手始めに、1981 年からは「ナホトカ青年の船」交流旅行を開始(1991 年まで 10 回実施)、ソ連から経済関係者や政治学者を招待してシンポジウム、セミナーを開催した。ナホトカのピオネールキャンプに日本の子供たちを送って交流を始めたのは 1984 年からで、筆塚真理子さんには 85 年夏に子供たちの指導員兼通訳でナホトカに行っていた(教育交流の旅を始めたのも 85 年 12 月から)。

1984 年末にソ連対文連と交流協定を締結。時あたかも 85 年 3 月にゴルバチョフ氏がソ連共産党書記長に就任し、ソ連社会の改革(ペレストロイカ)と米ソ核軍縮にむけて大きく舵を切った頃だ。日本でもソ連・ロシア報道が急増しロシア語学習熱が高まる中で、JIC のロシア交流活動は急拡大した。

JIC の活動を旅行実務の面で支えるために 1986 年 4 月に旅行会社「親善センター」(ジェーアイシー旅行センターの前身)を日通旅行の代理店として設立。この時期、JIC は青年交流、子供交流、学生交流、教育交流などのツアーで日ソの市民交流を拡大し、同時にソ連から学者やジャーナリスト、政治家を招待して講演会やシンポジウムを度々開催、またゴルバチョフ論文集を翻訳出版するなど、極めて活発に活動した。1987 年からはソ連クルーズ船の日本受け入れも開始した。東京晴海や大阪港、神戸港に停泊するソ連船にロシア語を学ぶ学生たちを誘って出かけていきロシア人観光客と交流会を持つのはとても楽しい仕事だった。

毎年春先に行っていたソ連対文連との定期協議では常に 10 ～20 の交流案件を提案し、実現に持ちこんだ(中には計画倒れもあったが)。当時はソ連だけでなくモンゴルや中国、台湾などとの交流も行っていたのだから、今から考えると「本当によくやったな」と思う。そのころは 5 人のスタッフの誰かが、ほぼ毎月海外

出張に出かけていた。



クルーズ船で開いた船上交流会の一コマ

外国との交流に際しては、まずは「言葉の壁」がある。学者や専門家同士の交流にはプロの通訳が不可欠だ。徳永晴美さん、米原万里さん、柴田友子さんなど第一線のロシア語通訳の方々によくお世話になった。しかし、活動が拡大していくと、いつでもプロ通訳さんをお願いするわけにはいかなくなる(通訳さんたちは超多忙だったし、それにつれて通訳料もハネ上った)。

1980 年代後半から 90 年代初めにかけて、JIC が最も活発に対ソ連(ロシア)交流を行っていた時期に、きわめてフットワーク軽くロシア語通訳ガイドとしてほぼ専属的に JIC を支えてくれたのが、まだ学生・院生だった若き日の黒田くんだった。初めて出会った時は「童顔の学生さん」だったが、一緒に仕事をした後では「学生なのにとんでもなくよくできる人」に黒田くんの印象は一変した。私もまだ 30 代前半、若い者同士の気安さで、ロシア旅行の添乗員や訪日代表団のアテンドなどを次々と頼むことになった。

当時、ソ連(ロシア)旅行をすると、現地のガイドでたどたどしい日本語をしゃべる学生アルバイトが出てくることがよくあった。ガイドぶりはぎごちなかったし、時に原稿棒読みで漢字の読み方など時々間違うこともあったが、ロシア人学生たちは概して正確な日本語を話した。「日本の学生はこうはいかないな」と思っていたのだが、黒田くんの通訳ぶりは「おお、日本にも優秀な学生がいるんだぞ」と胸を張るのに十分だった。考えてみれば、当時は日本からソ連に留学するルートも、ソ連から日本に留学するルートもほとんどなかった。日本語(ロシア語)を学ぶ学生たちの中には、大学での勉強とともに、通訳ガイドのアルバイトなどわずかな機会をとらえて必死に勉強していた人たちがいたわけだ。そういう人たちの中から、黒田くんのように「留学しなくてもここまでできる」という人たちが、ロシアでも日本でも輩出されてきた。

しかし、ロシア語人材はまだ足りない。ロシア語のできない私としては、「なんとか自分に代わってロシア交流を担ってくれる人材を育てたい」という思いが募り、当時ロシア語私費留学を一切認めなかったソ連当局の扉を 2 年がかりの交渉でこじ開けて、1989 年 9 月からレニングラード大学とウラジオストク極東大学にロシア語留学生の派遣を開始した。以来 30 年間にわたってモス

クワ、ペテルブルグ、ウラジオストクにロシア語留学生の派遣を続けている。

黒田講演にあるとおり、「現地に行けばなんとかなる」といった安易な留学は、確かに危険だと私も思う。留学を始めた当初は「親が反対しても留学する」という意志の強い猛者が結構いたが、最近では親同伴で留学相談に来て、本人よりも親の方が留学に熱心というような世相の変化も気がかりだ。「外国語を身につける苦労、単語を覚える苦労は、日本にいても留学していても同じだよ」という黒田くんの忠告を肝に銘じて、ロシア留学を志す人はよくよく準備の上で出かけてもらいたいと思う。

(ジェーアイシー旅行センター(株)代表取締役、国際親善交流センター副会長)



モスクワのグルメ・プロジェクト

チステリーナ・イリーナ (JIC モスクワ)

最近、ロシアの外食産業は著しく発達し、グルメ事情が一変しました。

今モスクワでは1つの場所に様々な国の伝統料理店を集めるグルメ・プロジェクトが大人気です。ソ連時代からある古い市場をリニューアルして、ニューヨークの「チェルシー市場」やバルセロナの「ボケリアマーケット」などにインスピレーションを得た素敵なフードコートが次々に登場しています。市場を歩くと、古代の商業の雰囲気を経験することができます。「うちの店を見てってよ!」、「これを食べてみて! 美味しいよ!」、「パスタはどうですか!」、「パンケーキはいかが!」...、店員の賑やかな声がお客さんを包みます。

一番がピュラーなグルメプロジェクトをここでご紹介します。

ウサチェフスキー市場

場所: Usacheva str., 26

(地下鉄スポルティブナヤ駅から徒歩 10 分)

営業時間: 月・木 8:00~22:00、金・日 8:00~23:00

URL: usachevsky.ru

ツェントラリヌィー (中央) 市場

場所: Maroseyka str., 4/2

(地下鉄キタイ・ゴロド駅から徒歩 5 分)

営業時間: 日・木 8:00~24:00、金・土 8:00~25:00

URL: maroseyka4.ru

ダニロフスキー市場

場所: Mytnaya str., 74 (地下鉄トゥールスカヤ駅から徒歩 5 分)

営業時間: 毎日 8:00~21:00

URL: danrinok.ru

ウサチェフスキー市場とダニロフスキー市場では新鮮な野菜やお肉、魚、キャビアなども売られているのですが、いまや「市場」というよりも「フードコート」という感じです。

これらの市場には、ロシアと CIS 諸国の料理はもちろんですが、ヨーロッパ、アジア各国の料理もたくさんあります。休日には色々なフードフェスティバルが行われています。オフィス街にありますから、平日の昼時(13 時ごろ)は周辺オフィスのランチタイムで混雑します。フードコートのほとんどのお店では銀行カードが使えます。グルメで楽しいお勧めのスポットです。

モスクワ観光の合間に是非のぞいてみてください!



中央市場の外観↑ フードコートの店↓



『ロシアの旅』レポート サハリンの旅 雑感

神保 泰興 (JIC 東京)



2018 年 11 月末、思い立ってサハリンを訪問した。私はロシアに関わって 30 年近くなる。訪口歴も通算 60 回を超えるのだが、実はこれまでサハリンに足を踏み入れたことがなかった。

冷戦末期に少年時代を送った者として、最初にサハリンを意識したのは 1983 年に起こった大韓航空機撃墜事件だった。大韓航空のジャンボジェット機がソ連領空を侵犯し、ソ連空軍戦闘機のミサイルで撃墜されて、乗客乗員 269 人がサハリン沖に消えたショッキングな出来事は、ソ連という国への不信と恐怖を起こさせるには十分だった。かつて日本の統治下にあったその島は、オホーツク海の荒波の向こうに暗く浮かび上がる、決して足を踏み入れることのできない危険な場所というイメージが強く刻まれた。それからわずか 6 年、サハリンは 1989 年に外国人立ち入り制限が解除され、やがてソ連は過去のものとなった。自由に往来できるようになってからすでに 30 年近く経っているというのに、いまだサハリンに行く機会を作れなかったことがずっと気がかりだった。

双発プロペラ機・ボンバルディア DHC8-Q400

今回はウラジオストク経由で 2 泊 3 日の旅程。成田空港 28 番ゲートで私を待っていたのは HZ3639 便・ボンバルディア DHC8-Q400。成田発の国際線では極めて珍しい双発のプロペラ機で、これは HZ の成田・サハリン直行便も同じ機種が飛んでいる。HZ はアエロフロート傘下のオーロラ航空。かつてサハリン航空と呼ばれていた会社の運航機材はすでに自国製航空機ではなく、すべてエアバスかカナダのボンバルディア製に統一されている。通路を挟んで両側 2 つの座席が 19 列、計 76 席の小型機だ。見たところほぼ満席。窓側の 12A 席に陣取る。キャビンアテンダントは男性 1 名、女性 1 名。定刻より 5 分早い 13:00 にドアが開まりロシア語、英語、日本語の録音で機内アナウンスが始まった。ほどなくエンジンがスタート、2 基合計 1 万馬力のターボプロップエンジンがうなりを上げる。機体はすぐに動き出し 13:20 には成田を離陸していた。

離陸後 30 分ほどしてドリンクサービスが始まる。オレンジカトマトジュース、ミネラルウォーターの選択で食事の提供はない。乗り慣れたジェット機と違い、プロペラ機はより低い高度を飛ぶ。雲海の下すれすれを巡航するため、雲の隙間から日本海がよく見える。離陸後 2 時間ほどで着陸態勢のアナウンスがあり、経路地のウラジオストクに現地時間 16:40 頃に着陸した。時差 1 時間だから 2 時間強の飛行時間。日本海を飛び越すだけのこの近さ

に、日本とロシアが隣国であることを改めて実感する。ウラジオストクで入国審査を通り、サハリン行きの国内線に乗り継ぐ。約 2 時間後に出発した国内線の機体も成田線と同じ DHC8-400 だった。76 席がほぼ満席。アナウンスはロシア語と英語のみ。離陸後 15 分ほどで食事とドリンクのサービスが始まった。ミールはサンドイッチで、チキンか野菜のチョイス。2 時間も飛ばない国内線だというのに嬉しいサービスだ。味も悪くない。それにしても、国際線でドリンクしか出ないのに、飛行時間がより短い国内線でミール提供があるというのは、どういう違いからなのだろうか。

石油ガス開発の重要拠点に変貌した極東の僻地

ウラジオストクからさらに時差が 1 時間プラスされ、飛行機は定刻より 30 分早い 21:30 にユジノサハリンスク・ホムトヴォ空港に着陸した。日露戦争後(1905 年)から第二次大戦後(1945 年)までサハリンの南半分は日本の統治下にあった。かつてユジノサハリンスクは豊原といい、この飛行場は大澤飛行場と呼ばれていた。駐機場からターミナルビルまで 100 メートルほど歩く。外気温は 1 度。煌々とした照明が暗闇の中にいくつかの無骨な建物を浮かび上がらせている。少年時代のサハリンのイメージが蘇ってくる。

到着ロビーに入る。ターンテーブルの前で荷物を待っていると、ふと横のコーナーにサハリンとクリール諸島の観光案内パンフレットが置いてあるのに気付いた。サハリンとクリールの自然美を紹介した写真とともにロシア語と英語の紹介文がついている。露天風呂の紹介まであったのはいづれ日本人観光客も来るだろうということか。しかし、色丹島や歯舞群島も小さな字で書き込まれている。

15 分ほどで成田で預けたスーツケースを受け取る。定刻より早く着いたので出迎えはまだ来ていない。荷物を引きずって建物の外に出てみる。出口左手には、新しいターミナルビルが建設中だ。ちょこちょこと歩くうちに迎えドライバーのアンドレイ氏が現れた。22:00 定刻の到着時間だった。

日本製中古車トヨタ・カローラスパシオに乗り込み、ホテルに向かう車中でしばし歓談する。アンドレイ氏はロシア本土出身だが、サハリンへは兵役が終わってすぐの 1991 年に移住してきたそうだ。遠隔地方での定住を促す優遇策があるし、自然も豊かだから住みやすいと笑う。ホテルまでは 15 分ほどの距離なのだが、「サハリンは初めてだ」と話すと、せっかくだからとユジノサ

ハリンスク市内を一巡してくれる。深夜なので明かりはほとんど消えていたが、建設されたばかりの大きなロシア正教会や整備中の公園などが車窓に映る。サハリンはモスクワから見れば極東の僻地だが、日本に隣接する窓口でもある。近年、石油ガス開発で経済的重要性が増大した。ロシア政府がかなりの予算を投入してインフラ整備を進めている様子が見て取れる。とはいえ決して広い町ではない。市内を端から端まで車で巡ってもほんの 15 分ほどの寄り道でしかなく、すぐに宿泊先ホテル「パシフィックプラザ」に到着した。

このホテルはサハリンが石油採掘で沸き始めてから暫くたった 2006 年に建てられた。シングルルームが圧倒的に多いのは用途がビジネスホテルだからだ。フロアの一部はオフィスとして提供されており、北海道新聞の支局も入っている。翌朝 2 階レストランの窓から外を眺めると、目の前の平和大通りを日本の中古車がひっきりなしに行き交っている。市街地の先にはゴールヌイ・ヴォーズドゥフという高台が見える。かつて旭ヶ丘と呼ばれていた高台にはスキー用のリフトが整備されている。冬季にはロシア本土からスキー客がよく来るとのこと。ホテルの地下にはスキー用品置場が 2 室あり、シーズン中はゲレンデ下まで無料シャトルバスを運行しているそうだ。

歩いて回れるユジノサハリンスク市中心部

翌朝、ロビーで現地パートナー会社のオリガさんと待ち合わせる。彼女はサハリン生まれ。ウラジオストクの大学を出たが、サハリンに戻って結婚し、子育てをしながら日本センターで日本語を学んだそうだ。ご主人は警察官。息子さんは現在モスクワ大学在学中。お嬢さんは高校生で日本語を勉強中、夏には短期語学研修で北海道に行き、ホームステイしたとのこと。昨日のアンドレイ氏の運転でオリガさんとともに市内視察をスタートする。

気温は 5 度、風はわりあい温かい。空港・市内間や市内の主要道路は舗装がしっかりしているが、郊外に出るとサハリン内の町と町を結ぶ幹線道路でもまだ未舗装のところが多く、冬季は積雪もあるので、サハリンをくまなく移動するなら四輪駆動車が必須だそうだ。

いくつかのホテルを視察した後、車を降りて市内の観光スポットを見て回る。市内中心部は 1.5 キロ四方程度とコンパクトなので、ほとんど歩いて回れる。メインストリートのレーニン通りを歩き、ユジノサハリンスク駅南側にある「ヴェルヌイ市場」を覗く。加工食品や洗剤などの日用雑貨は中国製もあるが、距離的に近い日本や韓国製のものが目立つ。市場外の小さな商店にも日本製の洗剤やトイレトペーパー、調味料が普通に並んでいた。海産物の店にはサケ・マス類やオヒョウなどが丸々 1 匹並べられていたが、ちゃんと切り身も販売されていた。店員によると、サケ・マス類は寄生虫対策のため鮮度に関係なく一度冷凍しているとのこと。イクラが小ぶりのバケツに盛られて売られている。カニは複数の専門店があり期待通りの廉価。茹でたタラバガニ、毛ガニのほか、活カニを扱っているところもある。日本人出張者は、お土産に保冷パックで沢山持ち帰るらしい。イクラの缶詰も土産

によく売れる。朝鮮系の人の店も多く、キムチやチャンジャ、ワラビなどの惣菜類がたくさん並んでいる。

郷土博物館とチェーホフ記念文学館

サハリンに点在する日本統治下の遺構の代表格はサハリン州立郷土博物館だ。ここは旧樺太庁博物館だったところで、展示室の配置も旧樺太庁のそれを踏襲しているそうだ。地下 1 階がサハリンの地質や考古学に関する展示、1 階が自然、先住民に関する展示、2 階がサハリン開拓以降の展示になっている。興味を惹かれたのは近現代史の展示で、日本統治下の生活や駐留していた旧日本軍の軍装などの展示が数多くあった。かつて日本とロシアの国境に置かれていた標石もあり、表と裏に大日本帝国とロシア帝国それぞれの紋章が刻まれている。戦後ソビエト時代の展示室もあったが閉鎖されていた。



旧樺太庁の建物を使ったサハリン州立郷土博物館

続いて訪れたのはチェーホフ記念文学館。1890 年にロシア帝国の流刑地だったサハリンを訪れて踏査した文豪チェーホフの業績を展示した博物館だ。チェーホフゆかりの品々だけでなく、当時のサハリンの生活用品などが、マネキンや再現映像と組み合わせてわかりやすく展示されている。日本語の解説文もあった。チェーホフに関心のある人だけでなく、帝政時代のサハリンの様子を知る上でも興味深い博物館だ。

手厚い定住促進策、しかし若者は都会に出たがる



名物・キュウリウオのフライ

ロシキをチョイスする。オホーツク海の恵みを堪能した。

オリガさんによると、サハリン州の住民はロシア本土に比べて割増賃金、割増休暇が与えられ、年金受給開始年齢も本土より早い。さらに年 1 回希望するロシア国内都市への無料航空券が

昼食は、オリガさんお勧めのレストラン「チョールナヤ・コーシカ(黒猫)」へ。メニューには定番のロシア料理も並んでいたが、折角なのでサハリン名物・キュウリウオのフライと魚スープ(ウハー)、サバのピ

もらえるそう。このような定住促進策はある程度功を奏しているようだが、若者はやはり都会へ出たがるので、モスクワ大学へ進んだ息子さんがサハリンに戻ってくれるのか気にしている様子。賃金が高い分、物価がモスクワ並みに高騰しているのも悩ましいという。

オリガさんと別れ、歩いてユジノサハリンスク駅を見に行く。この駅を発着する列車は 1 日最大 8 往復しかないが、駅前広場はサハリン内の各都市を結ぶ中長距離バスターミナルを兼ねており、沢山の人が往来している。列車の発車直前まで乗客はホームに入れないので、駅の待合室は大きな荷物を持った人たちでごった返していた。駅前バスターミナルには泥だらけの中小型バスが並んでいたが、行先を示す標識や時刻表はいくら探しても見つからない。乗客はフロントガラスに掲示された行先を見て、運転手に出発時刻を尋ねて確認している様子だった。



ユジノサハリンスク駅の待合室、壁には地図と路線図

バスターミナルの先はレーニン広場につながっており、ロシアであまり見かけなくなった巨大なレーニン像が立っている。クリスマスまで 1 カ月近くあるというのに、もう巨大なツリーがレーニン像をふさぐように立てられていた。1917 年の十月革命から 100 余年、レーニン像は何を想うか。ちなみに、前年に建てられていたツリーは、クリスマスのさなかに飾り付けの電気配線のショートで全焼した。レーニンの呪いではないかと噂されたらしい。

ジョージア料理店「チフリス」と日本食レストラン「ふる里」

夕食は、サハリン駐在の知人とレーニン通り沿いにあるジョージア料理店「チフリス」に入った。モスクワにあってもおかしくないようなおしゃれなレストランで、サハリン駐在の日本企業などが接待でも利用しているそう。ハルチョー(仔牛のシチュー)、ハチャプリ(ジョージア風卵入りピザ)などでお腹いっぱいになった。外へ出ると、中心街は遅くまでネオンがついており、賑やかに人が行き交っている。その風景はかつて抱いていたサハリンの暗いイメージを払拭するのに十分だった。

翌日は前日と打って変わってマイナス 8 度、吹雪が舞う。風が強いので体感温度はもっと寒く感じる。地理的には北海道のすぐ北に位置するサハリンだが、ここはやはり北海道ではなくロシ

アの一部なんだろうと思う。

昼食は、混雑時を外して少し遅めに、サハリン随一と言われる駅前の日本食レストラン「ふる里」へ行った。店の雰囲気もスタッフのサービスも良いが、チャーシューメン 550 ルーブル(約 1100 円)、天丼 400 ルーブル(約 800 円)など、価格も日本食レストランとしてはリーズナブルで嬉しい限り。



レストラン「ふる里」の入口、右はオーナーの宮西豊さん

食事を楽しみながら、御年 84 歳になられるオーナーの宮西豊さんのお話を伺うことができた。宮西さんはサハリンに渡って 28 年。当初はこの地でタクシードライバーなどを勤めたこともあったそうだが、現在ではレストラン経営の傍ら孤児院への寄付や桜の植樹など慈善活動を行い、ユジノサハリンスク名誉市民の称号を授与されている。数日後には日本に一時帰国し、海外での日本食普及への貢献で外務大臣表彰を受けられるそう。地道な活動を続けてこられた宮西さんのような方々の貢献の上に、今日の日ロ交流があることを強く実感した。

* * *

2 泊 3 日の滞在は瞬間に過ぎ、早くもサハリンを離れる日が来た。吹雪の中、市内からホムトヴォ空港へ車に向かう。帰国はハバロフスク経由になるので搭乗するのは国内線だ。ゲートの先に待っていたのは 128 席仕様のエアバス A319 型機。機内は半分くらいしか埋まっていない。Q400 なら満席だったろうに、せっかくのエアバスがもったいない気がする。機内アナウンスはロシア語・英語だが、安全のしおりには日本語・中国語・韓国語も記載されていた。定刻 17:30 に離陸。機体が雲海を突き抜けると、下界の吹雪と打って変わって晴れた空に躍り出る。夕方の空が少しずつ赤く染まり始めている。

機内食のサンドイッチは魚かチキンのチョイスだった。かつてロシア語を習い始めた頃、サンドイッチはブティルブロードと言うと教わったが、パッケージには「サンドイッチ」とロシア語で書かれている。そういえば最近ロシア風のオープンサンド＝ブティルブロードをあまり見かけなくなったと唐突に思い出した。

西に向かう飛行機は、太陽を追いかけて飛ぶので、夕陽はなかなか沈まない。ソ連邦解体から 30 年近くたち、ロシアもサハリンも時代とともに急速にその姿を変えつつある。夕陽に照らされながら、多くの旅人に今のサハリンを見てほしいと思った。(了)

【ちょっと変わったベラルーシ留学記】 エピソード編 (3)

冬物を求めて ルーノクへの遠い道

鎌田 幸伸(ロシア語通訳案内士／奈良県在住)

ルーノクへの遠い道

9 月になると私は留学を秋まで延長しようと考えた。...。問題は衣類である。私はコート以外は夏服しか日本から持ってこなかった。ロシア、ベラルーシの秋は日本の真冬と同じなので、冬用の衣類を買う必要があった。ロシアの秋は凍てつくように寒く、「快晴の空が豹変して雪が降り出す」のを今までの経験でよく知っていた。急がなければならなかった。

「ルーノクに行って必要最小限の冬服を買おう。デパートは高すぎる」

ロシア、ベラルーシにはルーノク(рынок)という青空市場がある。フリーマーケットとも言えるが、この市場は少し独特だ。...、普通、スーパーやデパートで売られている商品は公的な流通ルートを通じて店頭で。もちろん品質やサービスも保証されている。ルーノク(これからは市場と書く)は、例えていうと(日本の)朝市あるいは戦後の闇市みたいな感じだ。大きな広場があり、大勢の“物を売りたい人たちが”集まってそれぞれテントを張り、机を出して商品を売る。商品は、さまざまな野菜や食品、衣類だったりする。そこで物を売っている人たちは思い思いの格好をした普通の市井の人である。

市場の魅力は、まず“破格の安さ”である。スーパー、デパートに較べたら何倍か安い。もちろん品質は落ちる。次に“意外性のある”品揃えである。ロシアのサンクトペテルブルグの市場でキムチやほうれん草を見たことがある。ほうれん草は「ウズベキスタンから空輸されている」と聞いた。キムチは朝鮮系ロシア人の手作りかと思われる。どこで作ったか知らないが味噌を売っていたりもする。

9 月に入って最初の日曜日、午後からミンスクの市場に行くことにした。名称は“ジダーノヴィチ”。直訳すると“ジダーノフさんの市場”となる。...

インターネットで検索するとアクセスが表示された。が、私はある噂を聞いていた。「寮のすぐ近所の停留所からジダーノヴィチ直通のマルシルートカ(小型乗り合いバス)が出ている」。地下鉄に乗って中央駅まで出て、バス停に行って乗り換えるのはしんどいと思ったので、その『直通便』で一直線に行きたく

と思った。寮の守衛さんに聞いてみる。

「あの...、ジダーノヴィチに行きたいのですが、どの停留所から行けばいいか知っていますか？」。

「北へ行ったら十字路があるから、その近所の停留所じゃないの？」。

十字路に行き、バス停の行き先表示板をみたが「それらしき路線」は出ていない。地下通路をくぐって向かいの通りへ行き、ベンチに座っていた高校生らしき女の子に聞いてみた。

「ああ、それはね、この道を真直ぐ行って、二つ目の角を右に曲がった停留所から直通のバスが出ているのよ」

(実に親切だなあ...)と思ってその通りに行き、停留所に着いたが掲示板にはまたしても「それらしき」バスの時刻表はない。で、停留所にやってきた若いアベックに聞いてみた。

女性の方がスマホを取り出して検索し、恋人らしき男性とあれこれ相談して言った。

「ここから直通のバスなんてないわ。...、で、私たちと一緒に行きましょう...」とこれまた親切に言ってくれるので、次に来たバスに乗った。途中までいくと「降りなさい」と指示された。女性はあれこれと説明してくれるのだがもうひとつ聞き取れない。とにかく一人で降りると「見たこともない場所」である。近くに人もいない。泣く泣く少し歩いて、通りの名前を見つけて地図と確認する。近くに大通りがあるのがわかる。そこまで行くとミンスクの中央道路に出て、しかも中央駅のまん前に出てきた(あれまあ...).

駅前のバス停で大勢の人が待っている。私はすぐ傍にいたおじいさんに聞いた。

「あの...、ジダーノヴィチに行きたいのですが、この停留所から行けますか？」

「行けるとも。1 番の番号のついたバスに乗りなさい」

おれを言って待っているとバスが来た。私は乗り込んで席に座った。...、どこをどう走っているのかさっぱりわからない。北上しているのだけなんとなくわかる。日曜日で車が多く、バスはトロトロと走り、数百メートル間隔で停まる。満員のバスに少し年配の女性が乗り込み、私の横に立った。

「席を譲りましょう。お座りください」と私が言うと、「いいえ、結構です」。

しばらく乗ると今度は小学 2 年生ぐらいの女の子を連れた若い女性がバスに乗り、私の横に立った。

「席を譲りましょう。お座りください」と私が言うと、「いいえ、結構です」。またしても断られた。

私の向かい側に座っているシックな服を着た若い女性がニヤニヤしながら見ている。(オレは何をやっても間が抜けてるな...)と自分で自分がおかしくなる。

ロシアで地下鉄に乗ったことのある人はわかるが、ロシアやベラルーシの地下鉄に“優先座席”なるものはない。これらの国では「年輩の人、子ども、子ども連れの親子、妊婦に席を譲るのは当たり前」であり、列車にそういう人が乗ってくると若い人は誰

でも“さっ”と席を譲る。日本みたいに「譲ろうか、どうしようか」などと迷ったり、若い人が傍若無人に座り続けることはまずない。それで私は「この国では積極的にこうした方がいいのかな」と席を譲ろうとするのであるが、案外人の心理は複雑なものである。

前の席で笑いをこらえて私を見ている美人の女性に聞いてみた。

「あの...、ジダーノヴィチに行きたいのですが、このバスで行けますか？」

「このバスでは行けませんよ。終点で降りてください。それから乗り換えて、...で行ってください」

女性は次の停留所で降りた。終点に着く。ガラんとしたバスターミナル...。客たちは四方に散っていく。たまたま近くにいた娘さんに聞いた。

「ジダーノヴィチに行きたいのですが、どのバスに乗ればいいのか知っていますか？」

娘さんはスマホを取り出すとネットで検索するのではなく、電話をかけ始めた。

「外国の人がジダーノヴィチに行くんだけど、バスがわからないそうよ。知っているかしら？」

娘さんは私にバスの番号を二つ、しかも発車の時間も教えてくれた。...。しばらく待っていると「目的のバス」が来て乗り込んだ。20 分ぐらい乗り、やっとジダーノヴィチに着いた。駅から板敷きの道を歩いていくとようやく市場についた。もう 4 時頃である。

大きな広場を取り囲んで屋根のある屋台があった。広場にも大きな板に商品を並べた屋台が幾つか出ていた。お腹がすいたので、市場のスタンドでハンバーガーとコーヒーで昼食をとった。

屋台はすべてもう閉店の時間で片づけを始めていた。とりあえず冬用の部屋着のパーカーとマフラーを買った。どちらも 300 円ぐらいだった。冬用の毛糸の帽子を一つ買った。これは 120 円ぐらいで掘り出し物だった。

広場の左側には体育館を二つ並べたような大きな屋内市場もある。入ってみるとここも閉店間際でほとんど店はなかった。まだ陽は高かったけれども店が開いてないのでは仕方がない。帰ることにする。

性懲りもなく「学生寮へ乗り換えなしのマルシルルートカで帰ろう」と、沿道に停まっている 10 台ぐらいの小型バスの運転手に順に路線を聞いてみたが、誰も「寮なんて行かないよ」と言う。

するとある運転手が、「寮って、あのペトロフシナ(地下鉄の駅名)の近くの难道？その近くの駅まで行くから乗れば？駅の近くに来たら教えてあげるよ」と言ってくれた。地下鉄のアカジェーミヤ・ナウーク駅まで来ると運転手は「ここだよ」と指示してくれた。それから地下鉄に乗り換えて寮に帰った。

寮に着くと守衛のおじさんは、「どうだった？ジダーノヴィチには行けたかい？」と聞く。

「はい、**無事**に行けましたよ」

「それはよかったねえ」と顔をほころばせて私の肩をたたいた。

湯たんぽ

二度目にジダーノヴィチに行く時は“へま”をしなかった。地下鉄でジダーノヴィチ直行のマルシルルートカの出ている駅まで行った。市場に行くマルシルルートカに乗りこむ。初めて行った時みたいな不安がないので周囲の景色をよく観察できた。地図で確認すると大した距離ではない。.....。

昼間に来たリイーノクは活気があった。店と人であふれている。大きな広場に会議用テーブルがふたつあわせて何列も並べてあり、子供用の衣類が山盛りに置いてあった。何十というテントが張っており、主に紳士用冬服が置いてあった。いくつも冬服を売るテントが並んでいるが、(それぞれ)店主の好みがあるらしく、個性があって見ていておもしろかった。

あるテントでセーターを一枚買った。サイズがわからないので、売り子のおばさんにサイズをはかってもらった。私が紺色のセーターを選ぶと、「そんな地味な色はやめなさい。これがあなたに似合うわ」と明るい黄色のセーターを差し出した。(田舎の中国人ではあるまいし...こんな派手なセーターとても着られない)と思って紺色のセーターを買った。すると「どうしてこの東洋人はこんな地味な色を選ぶんだろう？」と不思議がった。.....。

さらにセーターをもう一枚とスニーカーを一足、皮の手袋、安物の長袖のワイシャツを二枚買った。

ロシア、ベラルーシの冬服の定番は革ジャンである。冬は零下 20-30 度以下になるときがある。日本のように布製の衣類の重ね着で冬を越そうなどと思ったら自殺に近い。黒い革ジャンを粹に着こなした人はいかにもカッコよく、前々から憧れていた。革ジャン専門のテントに行く。革ジャンの値段がピンからキリまでえらく違うので店員のおばさんに聞くと、「2 種類ありますよ。秋用と冬用。秋用はそれほど厚くありません。冬用はマローズ(厳寒)にも耐えられます。」

「それでそのマローズは、いつ頃ミンスクに来るでしょう？」

「さあ、最近では暖冬だから 12 月を過ぎてからですよ。」

それを聞くと買う気をなくした(私は 12 月にはもう日本に帰っている)。「自分に来ない冬用」の衣類を買っても仕方がない。今持っているオーバージャケットで十分だ。

必ず買わなければならないものがまだ二つあった。ズボン下(股引)と湯たんぽだ。

下着の売り場に行った。ズボン下はあるにはあったが何だか値段が気に入らない。1000 円以上もする。売り場のおじさんに「これ、少し高くないですか？」と聞くと、「いや、これが普通なんだ」と力説する。

気に入らないのでやめた。

実を言うと最初にこの市場に来たとき湯たんぽを買おうと探した。

私は冷え性で冬は必ず湯たんぽを使う。足先が氷のように冷たくなり、そのままでは風邪を引くし夜眠れないからである。日本ならホームセンターに行けば手頃なものが手に入るが、この国にはそんな総合雑貨店はない。仕方がないので雑貨を売っている店に行って聞いてみた。

「あの、湯たんぽはありますか？」

「ガハハハハ！！」周囲の人たちは腹を抱えて大笑いした。

「おまえさん、まだ夕方だぜ。飲んで体を熱くするのはまだ早いぜ。」

オヤジはのどを指ではじいて見せた(これはロシアの身体表現で「酔っ払う」という意味である)。どうやら私の発音は「体に火をつけてくれ」と聞こえたらしかった。もう一度言い直した。すると「兄さん、これでいいかい？」と、置いてあるガスボンベ式のコンロを手にとった。

「湯沸し器ではありません。『湯たんぽ』です」。大きな声で単語を組み合わせていねいに言い直してみる。すると周囲の人たちは、「あ、湯たんぽねー。」やっとわかってくれた。が、みんな「ここには売ってないよ」と言う。「そんなものどこに売っているのか、自分たちは知らないね〜。」と一蹴されてしまった。

大学で先生に、湯たんぽはロシア語でグレルカ(Грелка)と呼ばれ、この国では薬局で売っているとあとで教えてもらった。だが寮の近所の薬局に行っても「ここでは売っていません」と取り合ってくれない。

今回、あるテントで薬局の場所を聞くと、「向こうの建物の中に薬局が一軒あるよ」と言う。

広場に隣接する建物の中に入って行った。建物は馬鹿でかく、しかも2つ、3つ(同じものが)隣接していた。ある建物は食料品専門で、野菜、果物、肉類などの小さな販売店が建物内にびっしり並んでいる。その2階には結婚式用のブライダルウェア専門の店がある(少し感性が日本人とは違うな)。別の建物は衣服や靴専用の売り場で、小さな服屋さんがまるで迷路のように立て込んでいた。「ここは広場のような屋台じゃなくて、老舗の店ですよ」という風に、なんだかプライドを感じる。実にバラエティーゆたかな店の配置である。

薬局で湯たんぽを買った。ほんの 300 円くらいである。が、日本の湯たんぽとはちょっと違う。厚いゴム製の湯たんぽで、お湯を入れる口をゴムで縛り付けるようになっている。商品の袋にロシア語、英語、ドイツ語の表示があった。「〇度のお湯を入れて、タオルを巻いて使ってください」と書いてある。ドイツ製らしかった。

こうして、私は来たるべきミンスクの秋に備えて、「冬用の衣類と道具」を日本語だの英語だのがさっぱり通じない市場で買い揃えたのであった。(つづく)

日本-ウラジオストク「対岸を結ぶ架け橋に」 願いを込めたエッセイ集 《近日発刊！》

榎本 真奈美 (同志社大学嘱託講師)

領土問題や平和条約の交渉が日ロ政府間で難航を極めるなか、国家レベルの問題なぞどこ吹く風、といわんばかりに互いに好意を寄せる民間人同士の交流はとどまるところを知らない。

ウラジオストクのジャーナリスト、オリガ・マリツェヴァさんの発案によりウラジオストクを中心にロシアと関わりをもつ日本人、そして日本と関わりを持つロシア人総勢60名以上が集まり、それぞれの体験談を綴ったユニークなエッセイ集が実現しようとしている。

その顔ぶれは実に多彩で、日本からは歌手の加藤登紀子さん、「マグロ大王」でおなじみの「すしざんまい」木村清さん、現在ウラジオストクで活躍するバレリーナ西田早希さん、日本の冷凍庫をロシアに輸出しながらタイガで狩りを楽しむ「日本のデルス・ウザラー」西川洋さんをはじめ、ウラジオストクで日本語を教える日本語教師、ロシア語を学ぶ学生、かつて軍事捕虜だった家族を通してロシアとの交流を続ける人……。ロシアからは、『右ハンドル』を書いた作家アフチェンコ、元ウラジオストク市長ヴェルケエンコ、日本研究者のモルグン女史、島根県から牡丹の花を輸出するアンドレーエヴァ、如願寺副住職ヴォルコゴノフ、ゴリーキー劇場監督ダンツィゲル、友禅染に魅せられ着物作家として日本文化を伝えるホヴァンチュク他、日本語通訳者、90 年代に中古自動車ビジネスを始めた人、沿海州テレビ局の元司会者、ロシアで日本の画家や写真家の展覧会を企画するキュレーターなど、こちらも年齢も違えば職業もさまざま、日本との関わり方もそれぞれだ。

世界を見渡してみると、「隣人ほど仲が悪い」と残念ながら相場は決まっているようだ。メキシコとの国境に壁をつくってしまったアメリカ、ロシアとウクライナ、そして、日本海の向こう側にある国々と日本の関係を見るだけでも十分だろう。

著者のひとり、歴史博士のアミール・ヒサムディーノフは言う、「神様のいたずらか、ロシアと日本は隣同士だ。『隣人と親戚は選べない』と言うではないか」と。

そう、選べないからこそ、いがみ合うよりは仲良くなりたい。

本書の第1章では、1990 年代の沿海地方で日ロ・ロ日双方の友好団体が民間外交の一環として日本人軍事捕虜の墓地を設立した活動や、平和のシンボルとしてウラジオストクに仏像が寄贈されたエピソードなどがルポルタージュ形式で紹介される。第2章は、日ロ双方の筆者が書いたエッセイ集だ。「アーティスト、教師、行政組織や企業の代表、翻訳通訳者、ジャーナリスト、公人、学生など極めて多彩な顔ぶれが集まりました。それぞれのエッセイには、隣国の文化に触れたときの話、他国の文化伝統を身を持って体験するという斬新で珍しい出来事が盛り込まれており、それは敬意を持って誠実に他者を理解し受け入れようとする試みでもあるのです」(オリガ・マリツェヴァ 前書きより抜粋)

目下、ロシア語、日本語の二言語で作成中、タイトルは未定ですが応援よろしくをお願いします！